

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	関口貴美子 (せきぐちきみこ)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	早稲田大学大学院人間科学研究科 修士課程 2023 年 3 月修了
発表年月 または事業開催年月	2023 年 7 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	日本社会医学会・第 64 回日本社会医学会総会・早稲田大学国際会議場
発表者(※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	関口貴美子、宮崎進一、扇原淳
発表題目(※学会発表の場合のみ記載)	ドラッグストアが展開するケアラズカフェにおける社会的処方のプロセスに関する研究
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>背景・目的：地域包括ケアシステムでは介護の社会化が進展しても介護者支援は不可欠であるとされた。国は、地域共生社会の実現に向けてつながりの再構築と包括的支援を推進し、介護者についても地域での孤立予防、社会参加、相談機会の提供としてケアラズカフェの取り組みに期待が寄せられている。社会的孤立は健康に影響を及ぼしうる社会的な要因として知られ、対応策として社会とのつながりを処方する社会的処方が注目されている。しかし日本では保険診療として扱う社会的処方存在せず、介護者を対象とした社会的処方に関する研究はあまりない。本研究は、広くドラッグストアを展開する A 薬局株式会社が無料提供する店舗内コミュニティスペース (以下 A カフェ) に注目し、A カフェにおける介護者の社会的処方のプロセスを明らかにすることを目的とした。A カフェを一事例として、日本的リンクワーカーについて、また、地域包括ケアシステムにおける A カフェの位置づけについて検討した。</p> <p>対象・方法：2022 年 1 月～8 月の間、ケアラズカフェである 2 店舗の A カフェにて介護者 3 名を対象に半構造化面接法によるインタビュー調査を行った。聴き取った内容を IC レコーダーに記録後、逐語録を作成した。分析方法には複線径路・等至性モデリング (TEM) を用いた。本研究は、早稲田大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した (2022-060)。</p> <p>結果：介護者 3 名の A カフェにおける社会的処方の具体的径路を可視化した。分析の結果、【コロナ禍で交流機会が減少】し、親の介護や子のケアに悩んでいた介護者 3 名が A カフェを知ることとなった分岐点では、買い物等で来店した際の [外から見える集いの様子] [掲示板・パンフレットスタンド情報] が参加提案となって【A カフェに参加する】径路に進んだ。径路進行において、支え合える仲間やよろず相談できる従業員等を社会的助勢として、介護者と家族も支援者となつたり、介護者が周囲へのサポートをするきっかけとなった分岐点から、個々の径路は【ケアの機会をともにつくる】等至点へ収束していたことが示された。</p> <p>考察・結論：A カフェ入口付近の掲示板・パンフレットスタンドによる情報発信は、社会的つながりへの参加提案となり、A カフェは介護者がケアの機会をともにつくる活動の場として、社会的処方の機能を有していると考えられた。TEM 図で可視化された社会的助勢を通して見えた日本的リンクワーカーは、ドラッグストア・A カフェ、薬剤師、管理栄養士、医薬品登録販売者 (店長)、特別支援学</p>	

校教師，メディカルアロマセラピスト，元教師，元介護福祉士，一般社団法人障害者就労支援者，Aカフェの介護者仲間，介護者自身であった。傾聴力や行動変容を引き出す機能を持つリンクワーカーによって，介護者が〈ケアラーからケアラー支援者に変化〉し，成長していったと考えられた。地域の全ての住民を対象としたドラッグストアという生活のプラットホームにある A カフェは，地域包括ケアシステムにおいて生活支援・介護予防に位置づけられる。A カフェは社会的処方手段の一つとして，誰もが住み慣れた地域で自分らしい暮らしができるような全世代型地域包括ケアを具現化する可能性があると考えられる。A カフェのような社会的孤立の改善に資する社会的処方の貢献活動を普及促進するためには，CSR 型法人税減免等の新たな社会システムの構築が求められる。

(第 64 回日本社会医学会総会講演集,p69.2023)

※無断転載禁止